

歴史を追う、知的な登山

土地の物語を辿る山の旅
「低山トラベル」のススメ

低山トラベラー おおうち せい

NHK ラジオ深夜便「旅の達人 低い山をめざせ!」レギュラー、手書き地図推進委員会研究員 **大内 征**

ぼくの山旅のスタイルは、歴史文化が紐づく山から山へと“辿って”歩く。特に低い山には人の営みが大きく及ぶため、歴史文化の積み重ねが色濃く豊かだ。そんな風に山麓から山中へと、そして山から山へと旅の延長のように歩き、地域を体験しながら登山を楽しむことを、ぼくは「低山トラベル」と呼んでいる。登山というと特別なものと敬遠する向きも少なくないようだが、そう構えることなく、身近な低山里山から旅するにはじめてみようというものだ。

① 東京で“迷子”になったヤマトタケル



山頂を目指す登山をピークハントというが、それだけでは山を“消費”して終わってしまうと感じていた。辿ったルートと絶景写真を記録してみても、やがてどの山登りも変わり映えのないマンネリ行為になっていった。好きな山に登れば登るほど、自らの行為が消費とマンネリに陥るといふ、モヤモヤした矛盾。そこに光明となったのが、御岳山をはじめとした、その土地に伝わる山の物語だった。

伝承によれば、東征の旅に出たヤマトタケルが東京付近を通った際、邪神と戦い霧にまかれたという。現代でいえば「遭難」したわけだが、その危難をオオカミに救われる。この功績に

よってオオカミは神となり、山を護ることになった。その山こそが、東京の御岳山。いまなお“大口真神（神格化した狼）”として山の最も高いところに鎮まり、主に東京都下の農家の方々の厚い信仰を得ている。

御岳山は、気軽に登山を楽しめることもあってか、いつも賑わいがある。山頂付近には、武蔵御嶽神社という立派な社が鎮座する。美しい朱の社殿を仰ぎ見ながら登る階段は急だが、そこから振り返れば東京と神奈川の街並みが際限なくひろがる。そんなこともあり、てっきりそこを“山頂”だと思ってしまう人が多い。しかし、本当に大切なものは、寺社仏閣の裏にある、ということ覚えておきたい。この御岳山も“本当の頂”は裏手にあるのだ。

標高 929 m。山を嗜むハイカーにしてみれば低山の部類だが、御岳山山頂に鎮座する「大口真神社」は低さなど問題にならない独特の“深さ”でぼくらを迎えてくれる。なにしろ、狛犬が“狛オ

オカミ”なのだ。リアルな山犬に一瞬気のまれそうになるが、このオオカミこそ現代東京アグリカルチャーシーンの神、通称「オイヌさま」なのである。

農作物は、一番いい時に収穫をする。よし、明日は早朝から収穫だと気合を入れるが、その夜ひと足先に獣にやられてしまう。野生は“匂”を知っており、根こそぎ食い荒らしてしまうのだ。そんな獣害をもたらす動物を、自然のバランスを崩すことなく捕食してくれるのが「オイヌさま」だった。オオカミのいる山は農作物が守られ、果たして農家にとって神さまとなったわけだ。

ニホンオオカミの生息地だった東京近郊には、いまなおこのオオカミ信仰が息づいている。川を伝って流域の農家・商家にまで広がった。すなわち、多摩川流域だ。今日現在もこの地域の農家や民家の軒先には、オオカミが描かれた護符があちこちで見られる。憧れの大都市にも“ローカル”はあるのだ。東京の日常に、こうした土地の信仰や物語があることは、

地方出身のぼくにとっては嬉しい発見だった。



② 世界有数の大都会・東京は、日本有数の日帰り登山の聖地

このフレーズは、ぼくが主宰する登山の講義のキャッチフレーズの一つだ。東京の人には怒られるかもしれないが、宮城から憧れ一つで出てきたぼくが心

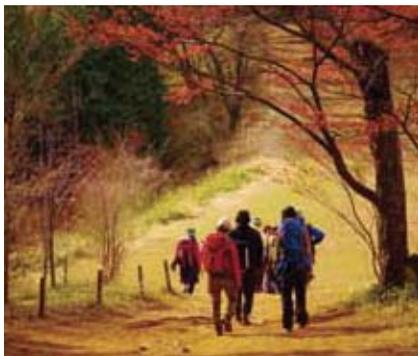
やすまる“とてもローカル”なものが、東京にもたくさんある。その一つが、先に紹介した御岳山の武蔵御嶽神社にある。現在、日本で2カ所しか残っていない、極めてプリミティブな神事「太占（ふとまに）」がそれだ。牡鹿の骨を焼き、その割れ方や模様によって占う、占いの原型のようなものである。現在も1月3日の早朝に行われており、この話に因めば、武蔵御嶽神社でおみくじを引くというのは、とても意味がありそうだ。なにしろ武蔵御嶽神社の主宰神は、櫛麻智命（くしまちのみこと）という占いの神さまでもあるのだから。

だいたい、当たり前すぎて気が付かないかもしれないけれど、東京は交通網が



大いに発達している。そのため、電車で気軽に登山口まで行けるという特長がある。これは極めて“都会的”で、地方出身者の感覚からすると、車がなければ登山口は遠い。しかも、東京で一番高いところは、宮城のそれよりも高いのである。東京都最高地点は、雲取山の2,017m。これに対し、ぼくの故郷・宮城県の最高地点は蔵王にある屏風岳1,825m。これを知ったとき、目から鱗とでもいおうか、視点によってその土地の見方は大いに変わることを痛感した。以来、ゴールドラッシュよろしく、東京の西部に遊びのフィールドを開拓したのだった。

③ 消費登山より、体験の山旅



考えてみれば、古より登山という行為は旅のスタイルそのものだったはずだ。商売に行くには峠を越え、修行僧や諸国見聞の旅人は尾根や川を伝い、合戦で隣国へ侵入するのも大方は山から攻めた。つまり、道はそうして切り拓かれ、踏み固められてきたといえる。いまぼくらが歩く山道は、もしかしたら、そうやって時代を経ていまに続いているものなのかもしれない。この道を、かつて戦国武将たちが通ったと想像するだけで、胸が熱くなる。

ところで、言葉の気分を自分なりに解釈すると、「旅」と「旅行」は似て非なるものだと捉えている。旅行の「行」は、行程つまり計画を指す。プランとスケジュールのことだ。旅には、この「行」の文字がない。旅先のタイトなスケジュールに縛られるのはほどほどにして、好奇心の赴くまま、というのが“旅”の要諦だろう。どちらにも、価値がある。行程を決めて交通手段や訪問先のセッティングが整っていることに価値を感じることもあれば、自らポイ

ントのみ決め、寄り道よろしく身軽に乗り出すことにも価値があるだろう。

しかし、こと登山に関していえば、行動時間は決めておく必要がある。何時にどのあたりにいるか、行動の完了はどこにするのか。山は平地より早く帳とりのが落ちる。場合によっては命を脅かすことになりかねない。だから、これから行く山のことを、よく調べておこう。しっかりと調べるところから準備がはじまり、そしてよい山旅もはじまっているのだ。

④ 登山は「知的な手段」という考え方

そんな登山を、ほくは「手段」だと考えている。登ること自体を目的とするのではなく、あるテーマを追うために登るということ。例えば、日本について学ぶ手段としての登山。地域を楽しむ手段、自分を高める手段、仲間と親睦を深める手段、健康の維持やストレス発散の手段。人それぞれにテーマは異なり、見ている風景は違うだろう。その意味では、歴史文化を辿る「低山トラベル」という山歩きのスタイルは、きっと知的な興奮を呼び起こし、地域、ひいては日本そのものを愉しむための有効な手段になる。

いま、さまざまな人と山歩きをご一緒する機会に恵まれており、とても嬉しい。実際に山を歩くとき、ほくはその土地の物語だけではなく、そ



の山に関係する“別の地域の山”の話もする。ある山のことを知ろうとするならば、その山のことだけでは不十分だからだ。そうした連続性があると、次なる低山トラベルへの思いを馳せるきっかけにもなるだろう。歴史や地理が苦手な人にとっては苦痛な時間の始まりかもしれないが、旅が好きなら、この山歩きスタイルは新鮮に感じられるのではないか。山脈ならぬ「文脈」を辿る面白さから、小さくとも好意的な感情を、山そして自然環境そのものに持ってもらえれば幸いだ。

⑤ 道に迷うことは、旅の原点

正確で最短のルートを探すことに慣れてしまったぼくらは、目的地を真っすぐ見据えるがゆえに、足元にあるさまざまな土地のウワサやエピソードを素通りしてしまっているようだ。各地を訪れた際、地元にある手書きの地図を探して収集しているのだが、距離感や方角、土地の高低差や街並みの具合が、不正確であるがゆえによくわからない。そんな手書きの地図を手にした結果、迷った挙句に“思わぬ発見”をしたことがある。つまり、迷ったほうが意味、町の面白いものに出会えるのだ。なるほど、これこそ旅の原点ではないか！ぼくは、田舎町の路地裏で快哉を叫んだ。

その人がその土地で暮らしてきた自分だけの思い出や愛すべき内緒話を可視化した地図。そこには、こんなことが書かれている。「おしっこが黄色くなるラーメン屋さん。家族で毎週食べに

行くのが楽しみ」、[「町民のほとんどが初デートで使う映画館」、[3時間並んでも買えない松茸屋」といった具合だ。店名がないのにエピソードだけがある、興味をそそられる地図。そこでどんなあたたかい物語があったのかは、推して知るべしだろう。



物語、といえば、ぼくにとって大切な言葉がある。

「自然を活かしているのは言葉なのだ。或いは歴史と言ってもいい」

文化芸術や旅について多くの作品を残した随筆家、白洲正子が紡いだフレーズだ。前後に文脈があるから、これだけを切り取っては、本来の文意を損なうかもしれない。しかしぼくは、この言葉にとてつもなく大きなヒントを感じている。すなわち、歴史を学んで土地を知り、そこに独自のテーマをもってストーリーを編み、言葉にするということに。その物語を語りながら山や地域を愉しんでもらうことができれば、持続的で、体験的で、知的な旅の在り方を実現できると考えている。

そういえば、東京の御岳山でも、道に迷った人がいた。彼のエピソードは山の歴史を言葉にした“物語”となってぼくの興味の扉を開き、単なるピークハントではない、土地の物語を辿る旅の面白さに目覚めさせてくれた。なるほど、御岳山を活かしているのは言葉、そして歴史なのだ。まさに、まさに。